

丸山稔

（令和元年八月号）

夜の更けのラジオに流るる大陸の歌曲とともに黄砂は降り来

FENに聴きモスクワ・北京に聴かざりしテイクファイブを月に

聴かせる

棒きれをもて「名を名告れ」と言いしゆえ額に小さき傷痕残る

箸を置き母の聴きたる「尋ね人」遺骨還らぬ兄思ひしか

再びは聴くこと無き世を祈りおり「尋ね人」なる悲しきラジオ

おだやかなおんじき・あそびで百歳をむかえたいから戦争するな



●作者の言葉

年間選者賞、短歌が大好き
と言うだけの未熟な私が戴い
ても良いのでしょうか。

幼くして父を亡くし、年齢

の離れた二人の兄を戦争で亡
くした母は、学校へは行って
おりません。後に夫となる私
の父から読み書きを学んだ母
は「学校に行きたかった」と

晩年私に洩らしたことがあります。ラジオを
真剣に聴いていた顔、新聞を懸命に読んでい
た顔が忘れられません。時々母の青春を想
像してみます。そして私は滂沱するのです。
この度の受賞は、小学生の私と勉強をした
亡き母への御褒美だと思っております。

●選者の言葉

選者賞を選ぶために、一年分の特選作品
を振りかえってみると、選者の潜在意識が
現れてきておもしろい。わたしは作品の底
に「祈り」を読みとりたいという傾向があ
るのだと思った。

祈りは事実や現実と違って自分のなかに
ある存在認識だ。それは状況という流動体
の背中に必死でへばりついていて。だが大
きな歴史のうねりのなかでは激しい揺れに
振り落とされたりすることだってあるだろ
う。不本意ながら…だがそのたびに祈りは
深まるだろう。

丸山さんの作品は過去から未来までを祈
りでつなぐとした。文字表現で過去と現
在をフラッシュバックさせるのは難しい技
だが成功している。